日本経済新聞　2018年（平成3

9/13

文　化

会津藩の北海道開拓記

◇沿岸警備で標津町へ移住　藩士たちとアイヌの親交◇

小野　哲也

会津藩士が幕末に北海道東部に入植し、北辺防衛と開拓に従事していたことはほとんど知られていない。拠点が置かれた標津町だけでなく、国元の福島県会津若松市でも、この史実を知る人は少ないだろう。

移住した藩士と家族らは総勢200人ほど。秋から極寒の冬には、鮭漁やミズナラの切り出しなどにいそしんだ。1859～68年に、現在の標津町の礎を築いたのである。

藩士らの足跡が忘れられてしまったのは、会津にあったはずの記録が戊辰戦争の動乱で失われてしまったからだ。埋もれた歴史を探ろうと、2011年に標津町歴史文化研究会が発足した。

蔵や櫓を描写

私は研究会のメンバーの一人で、標津町を流れるポー川流域の史跡を保護・管理する組織の学芸員を務める。史跡というのはアイヌ民族の歴史遺産で、この地には縄文時代から人が住んでいた。標津にやってきた会津藩士は先住のアイヌ民族とも積極的に交流していたから、この研究は私の専門分野とも関係が深い。

「標津番屋屏風」には標津での会津藩士たちの暮らしぶりが描かれている（西厳寺所蔵）

標津の会津藩士の存在が知られるようになったきっかけは1968年、町民の家から「御陣屋御造営日記」という記録が見つかったことだ。折しも町史編纂が進んでいたので急きょ一部が解読され、当地に会津藩が陣屋を設けていたことが明らかになった。89年になると、当時標津町で活動していた郷土史研究会が日記の全文を解読し、関連する屏風が見つかった。現在は新潟市の西厳寺が所蔵する「標津番屋屏風」である。

この写真が発見された屏風だ。鮭漁の様子が描かれている。画面の右、川岸に付けた舟から鮭が水揚げされ、人々が次々に建物に運び込んでいる。建物は塩切蔵といい、ここで鮭の腹を割いて塩漬けにする。中央には魚見櫓。その左が会所になる。アイヌの人たちの姿も見える。

日記と屏風という2つの発見で、会津藩による統治の詳細が少しずつ分かってきた。

幕府がロシアを警戒

1855年、蝦夷地は江戸幕府の直轄となる。同年に日露和親条約を結んでいたものの、幕府はロシアの南下を警戒し、東北を中心とする諸藩に沿岸警備を命じた。これは各藩に財政負担を強いることにもなる。そこで幕府は見返りとして、警衛地を藩の領地とし、開拓権を与えた。その際、現在の別海町から紋別市辺りを統治することになったのが会津藩だった。

会津藩は拠点を標津に定めると、現地の漁場番人やアイヌの人々と様々な取り決めを交わし、本格的に警衛・開拓を始める。当時、藩財政は逼迫しており、陣屋の造営費用を捻出するのに苦慮した様子が「御陣屋御造営日記」からうかがえる。

もっとも標津には豊かな資源があり、会津藩士たちの暮らしぶりは決して悪くなかった。冬の寒さはさすがにこたえただろうが、彼らはアイヌ民族と良好な関係を築き、順調に開拓を進めた。人々がいきいきと暮らす様子を描いた「標津番屋屏風」は、そんな状況を遠く離れた藩主に報告するために描かれた。

だが68年、新政府軍との間に戊辰戦争が起こると状況は一変。藩士と家族らの大半は会津に引き揚げていった。彼らが去った後の標津は、70年に設置された北海道開拓使が統治するようになる。

この歴史を語り継ぐ者は誰もおらず、藩士約20人の墓だけが標津に残された。時が経つにつれそれも守る人がいなくなり、1964年に2基のみが市街地から野付半島に移設された。

地縁ならぬ「史縁」

先行研究の成果を引き継ぎながら僅かな史料をつぶさに調べ、こうした歴史を少しずつ掘り起こしてきた。陣屋の開設から150年に当たる2013年には町内で企画展を開いた。西厳寺のご厚意で「標津番屋屏風」を貸し出していただき、町民に見てもらえた。

自分たちが暮らす土地の歴史を知ることは大切だ。研究をきっかけに会津藩ゆかりの人たちと交流が生まれ、地縁ならぬ「史縁」のありがたさをかみしめている。

標津の会津藩士については今なお、分からないことが多いのが実態だ。陣屋の図面がどこかにあるのではないかとも考えている。見つかれば遺構の発掘調査ができるだろう。焦らずじっくり研究に取り組んでいきたい。

（おの・てつや＝標津町ポー川史跡自然公園学芸員）